

「正しさ」の危うさ問

評伝

鶴見俊輔さんは、名実共に日本を代表する哲学者であり思想家だった。戦後、雑誌「思想の科学」や「ベ平連」などの活動で戦後思想に深い影響を与えた。片や漫画、大衆文化にも目を配り、「日本における正しさとは何か」について、暮らしの場から問い続けた。

「人間の究極の問題として、自分がまちがっているという可能性は、科学的に考えて排除することはできない」というのが、基本的な考え方で「す」。鶴見さんはかつて、ベ平連の活動をつて、「社会主義国家群に対する同伴運動で、自立していかない」と厳しく批判した思想家、吉本隆明さん（2012年死去）に対しそう答えている（対談「どこに思想の根拠をおくか」）。人間はしばしば間違ふ。ただ一つの正解や普遍性を前提にして

考え、活動するのは自分にできないといっている。正しいことへの「純粋な心情」が、「ウルトラ」に行きつくことの危うさを冷静に見つめた。現代日本の大きな課題を問うと、「ひたすら正解だけをもとめる明治以来の教育制度である」と何回となく返ってきた。祖父が後藤新平、父は鶴見祐輔。共に歴史に名をとどめる政治家の下で不良少年として生きたこと

を隠さない。戦時中の日本を日米双方の視点から見つめ、優秀とされた官僚的思考の貧しさを照らし出した。戦後、同志と創刊した「思想の科学」や知識人たちの思想の転向を取り上げた「転向研究会」で上げた「転向研究会」での知的エネルギーの注ぎ方、名もない人々が寄り添った「声なき声の会」の活動や米国の脱走兵の支援、後年の「九条の会」での活動……。鶴見さん

ほど市民的なつながりを大切にしている哲学者を知らない。

鶴見さんが加わった京都のサークル「家の会」や「現代風俗研究会」などで主婦や若い人から学び続ける姿勢も崩さなかった。「サークルは、自分の立場に固執せずに語り合える場として大切なんです」。いつも目をきらきらと輝かせ、その澄んだまなざしで「墓碑（もろろく）を盾に戦争に反対する」と熱っぽく語っていた姿が忘れられない。

（元・毎日新聞論説委員、池田知隆）